

(1) 参加したプログラムの内容及び主旨

国立病院機構の専修医海外留学制度（Department of Veterans Affairs Japan National Hospital Organization Visiting Resident Program）に参加させていただき、7週間、ロサンゼルス市の Veterans Affairs West Los Angeles Medical Center の外科と腫瘍内科のレジデントグループに所属し、アメリカの臨床と教育の現場を見学しました。5週間は外科、2週間は腫瘍内科にて研修しました。

外科では、カンファランスと朝夕の回診、手術・外来の見学を行いました。曜日によって予定は決まっていたのですが、ほぼ毎日手術が行われていましたので、手術見学が中心でした。レジデントは general surgery と colorectal surgery と surgical oncology と vascular surgery すべての分野を一つのチームで行っていたので手術の分野は多岐にわたりました。基本的には分野を問わず、上級医とレジデントが2人1組で、レジデントが主体となって手術を行っていました。肝胆膵外科の専修医になってからは特定の分野の専門的な手術中心でしたので、一般外科から入って、さまざまな専門的な外科の技術を習得していく1・2年目のレジデントの姿はとても刺激になりました。器具や技術・手法は日本と大きな違いはありませんでしたが、周術期の管理は我々の日常とは異なり、日帰り手術が多く、また在院日数も短く、合併症が生じても、地域の支援がしっかりしているのか、自宅でドレーンの管理等が行われることもありました。日本では腸管の手術等のおとはドレーンを入れていましたが、基本的にドレーンはいれず、合併症が起こってから留置するというスタンスでした。経口摂取開始のタイミングも非常に早く、午前中手術したら手術の種類にもよりますが、夕方の回診では飲水を開始していました。

外来ではレジデントがまず一人で診察し、その後上級医に相談し上級医と共に再度診察し方針を立てていました。基本的な方針が立ったあとは、患者のスケジュールを調整する専任のスタッフがいて、調整するので、忙しい外来ですが、非常にスムーズに進んでいたのが印象的でした。

UCLA のレジデントの出張病院の一つでしたので、VA hospital だけでなく、週に1回は UCLA のカンファランスや講義に参加する機会もいただきました。アメリカの教育の特徴なのか、自己主張がしっかりしており、意見をお互いに伝え合いながら講義が進んでいました。また、プレゼンテーションの能力も非常に高く感心させられました。

UCLA では私が専門で学んでいる、肝胆膵の分野のカンファランスや手術の見学もさせていただきました。レジデントのチームは縦と横・横と横のつながりが非常にしっかりしていて、他施設での手術の見学もそのおかげで可能となりました。

腫瘍内科では、カンファランスと回診、外来を見学しました。上級医とレジデントの関係が非常によくお互いに尊重しながら、患者と向き合っている姿が印象的でした。癌の患者はさまざまな病状があり、多くの分野のスタッフが一人の患者の医療に携わっていて、議論のひとつひとつがとても勉強になりました。

上記研修以外に本留学では、他施設からきている日本人の留学生や、ロサンゼルスで実際に

医療に携わっている日本の方と話をする機会をいただき、一人一人の目的意識の高さと生き生きとしている姿にとっても刺激を受けました。

(2) 留学で学んだことを国立病院機構が提供する医療の質改善のためにいかに活かすか
日本では、一人の患者と一人の医者との個々の関係が強いと思います。しかし、アメリカでは一人の患者対一つの病院・診療チームというスタンスで患者と医療者との関係があると感じました。そのため一つのチームで、スタッフ間での連携がよく、個々の専門性が高く、また、お互いに尊重し合っている印象を受けました。お互いの立場はあまり関係なく、お互いに意見を伝え合っていました。議論する場面や機会も非常に多かったです。教育の場面でも同様の関係がありました。

日常の臨床で、つい、自分の考えや気持ちを、強く他の医療スタッフに要求してしまうことがあります。一息ついて相手を尊重しながら、よりよいチームで患者と向き合うことが大切だと感じました。

(3) 留学生活に関して、以後本制度にて留学する者が参考になる情報
特定のカリキュラムは内ので、自分がしたいこと、見たいことをしっかりと相手に伝えたら、よりよい研修が受けられると思います。そういった面でも、できるだけ英語は勉強していった方が絶対がいいと思います。自分の気持ちを伝えられないもどかしさは常にありました。メールだと辞書などを使って文章をゆっくり考えられたので、コミュニケーションのツールとしては役立ちました。

